



かみぞのキッズクリニック

シックキッズニュース

2017年10月号(No.5)

●編集後記

去る9月23日秋分の日、オアシスホテルに於きまして、大分県小児科医会50周年記念講演会が開かれました。50周年記念という節目の栄えある特別公演には、当院の前身である阿南小児科医院・院長の阿南茂啓先生が演者として、“アルメイダ考”の演題で講演されました。ルイス・ド・アルメイダ。いうまでもなく、現在の大分市医師会病院の別名“アルメイダ病院”の名前の由来となった南蛮医ですが、先生の長年の研究に基づき、まさに波乱に満ちた生涯の一端を紹介していただきました。およそ400年前、ポルトガル・リスボンのコンベルソ(ユダヤ教からカトリック教に改宗した肩身の狭い思いをしていた一族)の一家に生まれたアルメイダは、青年期にかたぐるしい国を飛び出し、インド・ゴアで武器売買など“死”の商売で商才をあげ、億万長者となります。しかしなぜか鉄の結束軍団であるイエズス会に入信。宣教のため？戦国時代真っ只中の、豊後・府内にはるばるやってきて、大友宗麟の盟友となり、府内に日本で初めての乳児院(いわゆる赤ちゃんポスト)併設の病院を、これまた本邦初のボランティアをつかって運営。病院経営がうまくゆかずに破綻したのちも宗麟との友好関係は続き、薩摩との耳川の戦では、負け戦の中命からがら逃げのびた。その後も日本にとどまり、天草の河内浦で58歳?の生涯を閉じるまで、日本を出ることはなかった、というお話を傾聴いたしました。最後にフーテンの寅さんの映画監督、山田洋二さんから聞いたお話、“フーテンの寅さんに同情できるのは日本人とポルトガル人だけだよ”、でお話を締めくくられました。なんかじわりと心に染みる講演会でした。ありがとうございました。

受付時間	月	火	水	木	金	土
9時~12時	●	—	●	●	●	●
14時~18時	●	—	●	●	●	●

休診日/火曜・日祝日

9時より早く来られた方も、診療準備完了次第、順次診療しています。また夕方6時ぎりぎりまで受付しております。お気軽に相談ください。



インターネット予約が可能です

かみぞのキッズ よやく | Q

<http://kamizono-kids.com>

ホームページ
QRコードは
こちら



WEB予約
QRコードは
こちら



〒870-0822

大分県大分市大道町4-5-27 第5ブンゴヤビル2F

TEL:097-529-8833

●今月のフォーカス

当院が行っているぜんそく診療 再診編 いわゆる“ぜんそく外来”その1

先週に引き続き、当院のぜんそく外来についてのお話です。初診で“気管支ぜんそく”と診断のついた方は、咳が落ち着いたところを見計らい、ぜんそく外来につなげます。具体的には

- 月1回程度の予約診療
 - 過去1か月間のぜんそくのコントロール状態を、“ぜんそくコントロールテスト(JPAC)”という簡単な問診でスコアリングする
 - 呼気一酸化窒素(NO)測定を行う
 - ぜんそく定期薬を長期処方する
- という流れです。情報量がたくさんなので、今月は、月一度の予約診療の大切さと、ぜんそくコントロールテスト(JPAC)をつかった、ぜんそくのコントロール状態の評価について説明します。来月以降、もっと大事な呼気NO検査と、ぜんそくの定期薬(コントローラー)についてお話しします。

月一回程度の予約診療

こどもの気管支ぜんそくのほとんどは、ダニアレルギーの体質があり、それが鼻から肺の肺胞をつなぐ気道(気管支といいます)にダニがくっついた、その部分に気道のアレルギー性の慢性炎症が起きます。ダニを家から

根絶することは日本では不可能であるため、常にダニの死骸やフンが漂っていたり、布団に蓄積したりしています。つまり、ダニアレルギーの人の気道は慢性的な炎症が持続しています。



ぜんそくの人が炎症を抑える薬を自己判断などでやめた場合、気づかないうちに薬によって抑えられていた慢性炎症が悪化して、風邪や天候の変化などで、再び喘息発作を誘発してしまいます。ちゃんとした予防薬を使用しておらず、運動会や修学旅行直前にぜんそく発作がおきて、僕らのところにきて、何とかしてください！といわれても、後の祭りなのです。月1回程度の定期受診で、お子さんの喘息のコントロール状態をしっかり評価して、まわりのぜんそく児の状況も見ながら次の1か月間の治療方針を決めることは、お子さんが喘息発作を起こさず、日常生活を普通通りに行い、大事な行事に参加できるため非常に大切なことです。

中面につづきます

ぜんそくコントロールテスト JPAC

過去1か月間のぜんそくのコントロール状態を5項目(3歳以下の乳幼児は6項目)の質問で簡単にスコア化できるツールです。

- 1. 喘鳴の程度(1か月間に何日ゼーゼー・ヒューヒューいったか)
- 2. 呼吸困難発作回数(息が苦しくなる発作の回数)
- 3. 夜間覚醒の頻度(ぜんそく発作がでて夜中に目を覚ました日数)
- 4. 運動時のぜんそく症状(運動したらはしゃいだりしたときに咳が出たりゼーゼーいうか)
- 5. β刺激薬使用頻度(ぜんそくの発作止めを使用した回数)
- 6. 朝と夜の咳(熱がないのに朝や夜咳をする日数)

これに3歳以下のお子さんは、

6. 朝と夜の咳(熱がないのに朝や夜咳をする日数)

が加わります。

各項目、0点から3点まで点数をつけて、4歳以上のお子さんならば12点以上でコントロール良好、それ以下だとコントロール不良、3歳以下のお子さんだと、13点以上だとコントロール良好、11点以下で不良、と評価します。一方、4歳以上で15点満点が3ヶ月続けば、時期や周囲の状態を見ながらですが、治療方針を見直して、薬を減らしたり、一時中止を、逆に



11点以下であれば、まず、ちゃんと言われたように予防薬を飲んでいたか、吸入のやり方が変わったのではないか、吸入指導のやり直しを行います。きちんと飲んでいたり、ちゃんとできていることが確認出来たら、次に他にぜんそくコントロール状態を悪くする要因がないか、聞き出したり検査することもあります。例えば、アレルギー性鼻炎や副鼻腔炎(蓄膿)の悪化はないか、あまり熱が出ることのないマイコプラズマ肺炎やクラミドフィラ肺炎にかかっていないか、親子関係や友人関係、学校生活ですとれるになっていることはないか・・・などなど、ぜんそくのコントロールを悪くする要因を一つ一つ洗い上げ、悪化の原因を探ります。どうしても思い当たるものがない場合、定期薬の効果が薄いと判断して、お子さんのぜんそくの重症度評価をみなおし、治療ステップをあげることもあります。



このようにして、これまではぜんそくのコントロール状態を月1回評価して、定期薬を調整することでぜんそく発作を起こさないようにしていたのですが、最近、呼気NO検査という優れた検査法が開発されぜんそく診療を画期的に変えたので、次回説明します。

●今月のフォーカス2

9月初めに、ニュースになりましたので、小耳に挟まれた方もいらっしゃるかもしれません。日本耳鼻科学会が、おたふくかぜ罹患後の難聴の合併、いわゆるムンプス難聴の初めての全国調査を公開しました。その結果は衝撃的でした。

2015年からの2年間で、ムンプス難聴を診断された方は、全国の耳鼻科医療機関3536施設から336人(耳鼻科10軒に1人弱の割合!!)が報告され、その9割以上に当たる303人に後遺症(つまりやられたほうの耳が聞こえなくなった・・・)が残ったそうです。回答が寄せられた314人のうち、83%に当たる261人に高度の難聴(70から90dBの音、つま

りピアノ80dBが聞こえない)を認め、日常生活に支障をきたすレベルの難聴だったそうです。両側性の難聴の方も14人いたそうです。

おたふくかぜは、難聴以外にも、無菌性髄膜炎ならば、昔は保育園などで流行したら、そのうちの1-2人は必ず髄膜炎になる(比較的軽いことは軽いのですが)といわれるほど髄膜炎の合併が多い病気ですし、男の子は睾丸炎でひどい痛みを苦しみ、まれに不妊の原因になるともいわれていますし、これまた稀ですが、肺炎にも気を付けないといけません。インフルエンザのタミフルのような特効薬はありません。

ワクチンの話、あえてインフルエンザではなくで、おたふくかぜワクチンの勧め・・・ムンプス難聴、ってご存知ですか？

しかし、これもワクチンで感染が防げる病気です。おたふくかぜワクチンは、諸外国ではMMR三種混合ワクチン(麻しん・風しん・おたふくかぜ)として接種していますので、普通、MRワクチン接種にあわせて、これらと同時に1歳の時と小学校就学前の年長さんの時の2回の接種が一般的です。日本以外の国は、北朝鮮とかアフガニスタンとか戦争状態の国以外は当然公費か保険で接種可能です。日本では私が医者になったころの1990年前半に、MMR三種混合ワクチンによる無菌性髄膜炎の副反応が散見し社会問題にされたせいか、現在比較的 안전한ムンプスウイルス

弱毒株によるワクチンが開発された後も、国はおたふくかぜだけは定期接種化をどーしても認めてくれませんでした。

今回の日本耳鼻科学会の発表、遅きに失した感否めませんが、あまりに衝撃的なので、定期化に向けての大きな声明でした。定期化までは、まことに残念ながら任意接種なので自由診療ですが、皆さん、かわいいわが子に是非ワクチン接種をしてあげましょう。



●インフォメーション

その1 インフルエンザワクチンのインターネットでの予約を10/1から予約可能にします。

今年はワクチン製造に時間がかかっているようで、まだ卸からいつ入るかの確実な情報は現時点ではありませんが、一応10月18日水曜日からネットで予約枠をとれるようにします。新規開業で、当院がどのくらいワクチンを確保できるか現時点では不透明ですが、予約された方の分は何とか死守したいと考えています。予約の方のワクチンが優先です。が、在庫に余裕があれば、希望者にはどんどん接種はしていきたいと考えております。料金はすでに院内に表示しております。受付スタッフにお尋ねください。院内は比較的ひろびろとしていますので院内感染対策にも十分対応できると考えておりますので、安心して接種しに来ていただけたらと思います。

インフルエンザやインフルエンザワクチンについてはお話は、また次回以後、あるいは当院ホームページ、トップページの“お知らせ”の欄、9月1日付けにも、気が早いと思われるのですが、すでに記載しましたので御参考ください。

その2 就学時検診がぼちぼち始まります。特に食物アレルギーのお子さんをお持ちの保護者の方へ。

新1年生になられるお子さんをお持ちの保護者の方へ。市町村から就学時検診の通知が届くころかと思います。10月後半くらいから順次就学時検診が開始されます。大分県では、就学時検診で、保護者の申請による、アレルギー疾患(特に給食で問題になる、食物アレルギー)の実態調査を行うことになっております。とくに初めてのお子さんの場合で食物アレルギーもちでしたら、“給食は大丈夫?”とか、“どんなことを聞かれ、どんな風になるのか不安”、など心配不安があるかと思えます。

当院はアレルギー専門医による医院なので、当然食物アレルギー児の診療も一般小児科診療同様、特別な枠は設けず普通に行っております。おそらく後ほど提出を求められるとおもわれます、「学校生活管理指導表」についても、詳細な問診や、皮膚テスト、採血検査、経口負荷試験など、簡便で有益な検査でしっかり診断して(当院は文書作成料を頂いたうえで)責任をもって記載しております。

実は食物アレルギーはかなりの確率(つなぎに使用する程度の鶏卵加熱料理ならば10人中8から9人)で自然治癒することも多い疾患です。僥越ではありますが、こちらでは残念ながら不適切な食事指導を受け、たいへんな思いで、もしかしたら無駄かもしれない除去食をされているケースが多いように感じております。就学時検診でのアレルギー疾患実態調査をきっかけに、お子さんは、どれくらい食べることができるか、調べてもらいたい機会だと思えますが、いかがでしょうか？

万一、学校などで誤食事故があった場合での対応の指導も資料をお渡しするなどして、なるべくわかりやすくして、学校生活を送るうえでできるだけ不安を解消できるよう心がけています。重症者には、アドレナリン自己注射器である「エピペン」の処方もしております(一度詳しく説明して、資料をお渡しして勉強していただいたうえで、保護者や教諭の皆様、周囲の大人も接種ができるという方だけに2度目の診察で処方)。もしご不安な方がいらっしゃれば当院受診の上、なんでもご相談ください。もちろんアレルギー疾患以外のことでも、こどもさんの養育上の問題点や不明な点があれば、なんでもご相談ください。

